翻印　玉造小町子壮衰書七種　上　序の部

杤尾　武

書誌

ここに紹介する諸伝本の書誌はすでになされている[1]ものもあるのでそれらの書誌は必要最小限に止めた。

〔1〕　東京大学国文研究室蔵『玉造小町形衰書』巻子本一軸　鎌倉中期写　九條家旧蔵本

題簽・表紙ともに後補、金襴二重蔓大牡丹地包装表紙、本文料紙厚様鳥の子紙、裏打補修、朱の句・読点、音合、返点、黒の傍訓、声点等あり、本文部分、特に初めの部分に破損多し。影印本[2]あり。承久本[3]については附録資料参照。

〔2〕 水府明徳会　彰考館蔵『玉造小町状衰書』一巻一冊　巻尾　善相公作とする。宝徳二年（一四五〇）写。表紙・題簽後補、厚手の紙で原料紙を裏打ち補修。上下裁断のため注の一部を欠く。本文と後尾にまとめ記した裏書はともに同筆、仮名字体も同筆と認められる。雁金点、仮名字体（ヲ・その他）も室町期のものと考えられる。声点・音合あり。縦38・5センチ、横21・6センチ、元料紙、縦25・9センチ、横21・6センチ。

〔3〕 曼殊院蔵『玉造小町女壮衰書』[4]一巻一冊奥書・識語欠、筆者・書写年代ともに不明。特異な本文・字体を持つ。大ぶりな雁金点や仮名の字体等叡山文庫本とほぼ同じ頃の書写と目される。漢字の字体は空海のそれを模したか。別に考察したい。本文は古本の流れをくむ。

〔4〕 叡山文庫真如蔵『玉造小町壮衰書』空海撰一巻一冊　慶長十一年（一六〇六）写

題簽なし、表紙中央上部に朱の打付書で「玉造小町壮衰書　全」と題す。縦19・4センチ、横14・9センチ。朱筆の注記と墨の訓点あり。発句・緊句等『作文大体』に見えるものを注記。次の寛永刊本と極めて類似した本文と傍訓を有す。影印本あり。

〔5〕 成城大学図書館蔵『玉造小町子将衰書』空海撰　一巻一冊　寛永癸未（二十年＝一六四三）刊　縦24・5センチ、横16・5センチ　叡山文庫本とほぼ同系の本文を持つ。

〔6〕 京都大学文学部図書館蔵『玉造小町壮衰書註』一巻一冊　正保四年（一六四七）書写。縦28センチ、横20センチ

題簽後補。紺色かぶせ表紙と濃紺表紙。朱のヲコト点、読点。叡山文庫本と同じく、発句・緊句等を朱にて注記。本文の後に注解を加える。影印本あり。

京都大学文学部には〔6〕ともう一本、同内容の『玉造小町抄』一巻一冊を伝える。傍訓は正保写本に比して少く、仮名遣い、字体も、より古体を伝える。何より、正確に書写されていて、正保本の誤りはほぼ訂正できる。今回は解釈に必要なものに限定して書注の傍に抄との異同を「・」印をつけて記した。叡山文庫本・寛永本より古く書写されたものと思えるが、書写年代を伝えないのが惜しい。正保本とともに他本と本文の配列を異にしている点も一致するので、同一の祖本によったものと考えられる。内容的には〔1〕〜〔3〕の古本系本と叡山文庫本と寛永本系本の中間に位置づけられようか。

〔7〕群書類従巻百三十六、文筆部十五『玉造小町子壮衰書一首幷序』。群書類従は安永八年(一七七九)―天明二年(一七八二)間の成立であるので最も新しい版である。古写本三通と流布印本(寛永本・寛文三年本等)で校合した混成本。最も通りのいい本文を組み合せ、他本を異本としたらしく、七本の比較でほぼその様子がうかがえる。

諸本の詳細な比較検討については、次回詩の部で行いたい。ここでは必要最低限度の書誌に止めておいた。

(1) 川尻悦子〈『玉造小町壮衰書』と小町伝説〉(「文学論藻47号」(東洋大学国文学研究室　昭和48・1)で、十本八種の伝本を紹介。

(2) 山田・木村・杤尾編『玉造小町壮衰書』(笠間書院　昭和56・3)に〔1〕・〔4〕・〔6〕の三本を影印した。〔1〕については『弘文荘善本目録』(昭和32・10)に書影と書誌が見える。

(3) 承久元年(一二一九)写本は三都古典連合会の展観入札目録(昭和39・4)にはじめの半丁と奥書部分が写真紹介されていて、今回はこれを模写使用させていただいた。写真が小さいので判読できないところもあった。現存最古本として価値が高いが、所蔵者が不明のため礼を失することになった。濃淡二種の傍訓が見られ𛀁の如き古体を示す仮

名も見られるが、雁金点は室町末期ないしは江戸初期の形を示す。ちなみに東大本は雁金点ではなく返点（左傍下に朱点を置く）を用いているところや、仮名の字体が古体を示しているので、東大本の書写の方が古いのではなかろうか。ただ東大本の破損を補う意味でも価値が高く、再び出現してくれることを待望する。

（4）島崎健「翻刻　玉造小町女壮衰書」（「国語国文第52巻第9号　京都大学文学部国語学国文学研究室　昭和58・9）において曼殊院本の翻刻解題がなされている。

凡例

(1) 群書類従本と寛永本は複写本文を用い、他の五本はなるべく原本の骨法に近い形で模写した。ただし、ペン書きで筆筋を明らかにするように勉めた。

(2) 本文の配列は東大本と彰考館本によった。群書類従の頭に冠した番号は、笠間書房で影印した京大本に冠したもので、京大本は他本と一部、順序を異にしたところがあるので注意を要す。

(3) 七本をなるべく比較し易いように配列し、同一頁内に七本を配列した。

(4) 附録として、題・跋・奥書・刊記及び承久本の模写をつけた。

玉造小町子壯衰書一首并序

玉造の小町と小野の小町とおなし人なりといふ説あり又こと人なりともいふいにしへより兩説ありてたしかならす

鴨長明か無名抄にある人の云業平朝臣東のかたへゆきけりみちのくにいたりてやそ嶋といふところにやとかりたりける夜野中に哥の上の句を詠する声あり秋風のふくにつけてもあなめ〳〵といふ　あやしくおほえて声をたつねてこれをもとむるにさらに人なしたゝ死人のかうへひとつありあくるあしたこれをみるにかの髑髏の目のあなよりすゝきいでゝ生出たりけるか風のなびく音のかくきこえけれはあやしくてあたりの人に此事をとふある人かたりて小野小町此國にくだりて此所にして命を終ぬすなはちかうへこれなりと云業平あはれにかなしくてなみたをおさへ下句を付たり　その野ちは玉造の小野とそいひけるとそ侍る　玉造の小町と小野小町とおなし人かあらぬものかと人〻おほつかなきことに申てあらそひ侍りし時人のかたり侍りしなりと云〻

長明の説は玉造小町と小野小町とおなし人にしたるなり

北當准后親房古今序の注に小野小町か事分明なるす　仁明天皇承和の此の人出羽郡司か女國色無双の美人なりと云々　又云ある説に弘法大師のつくらしめたまふ玉造と云ものあり是は玉造の小町といふものむかし色かたちはなやかなりしか老衰たるさまを詩につくらしめ給たるなり、小野玉造その姓名別の人他人たりと云事うたがひなしと云々

親房の説は玉造の小町小野小町はこと人なりとみたまふなり

著好かれ〳〵草に云小野小町か事きわめてさだかならす　おとろへさまに玉造と云文にみえたり　此文清行かかけりといふ説あれと　高野大師の御作の目録にいれり　大師は承和のはしめにかくれたまへり小町かさかりなる事その後の事にて　なをおほつかなしと云々、

玉造は小野か姓なるへし　子はつけ字也、別に心なし、性靈書とは小町かわかくさかりなりし時より年たけ色おとろへたる此までを此書に云あらはせる心なり、一首とはおくにのせたる五言長篇の詩を云也、序とは發端より五言長篇の詩のまへまてをさしいふなるへし

沙門空海撰

沙門は出家の總名なり、空海は弘法大師也　撰とは大師此書をえらひ作りたまふ心なり、つれ〳〵草にもかけるごとく此書は安倍の清行といふものかきたりと云説あれとも、高野に大師の一代作りたまふ書物の目録あり、それに此玉造の書のせたれは大師の作りたかひなし

群　予行路之次　歩道之間　承久　予行路之次歩道之間

東　間

勢　予行路之次　歩道之間

曼　予行路之次　歩道之間

徽　予幾句行路之次　歩道之間　平

寛　予　行路之次　歩道之間

京　鷲緊句　予行路之次　歩道之間

予は我なり、大師のみつから我身をさしてのたまふなり、行路はみちをゆくなり、歩道は道をあゆむなり、幾句なれはあなし事をかさねいふなり、

群　徑邊途傍　有一女人

泉　徑邊途傍　有一女人

勅　徑邊途傍　有一女人

曼　徑邊途傍　有一女人

叡　徑邊途傍　有一女人

寛　徑邊途傍　有一女人

京　徑辺途傍　有一女人

義かくれなし　徑はほそ道なり、途は大みち之、

承久　徑邊途傍有一女人

群 容貌顧類ト　3-1
集 身躰疲瘦ト　3-2
彰 容貌顧類身躰疲瘦
曼 容貌顧類　身豐疲瘦
徽 容貌顧類　身躰疲瘦
寛 容貌顧類　身躰疲瘦
京 容貌顧類　身体疲瘦

容

容貌の二字いつれもかたちとよむなり　其内すこしのかわりあり容と云は耳目口鼻のおのつからむまれつきたるをいふ貌と云は耳にきく目に見口にいひ鼻にかぎてあやをなすかたちを云なり　容はかたちの体也貌はかたちの用也　顧類の二字かしけたりとよむ　体は四体とて二の手二の足をいふ　身をそへて五体ともいふ　身体は五体なり　疲瘦の二字つかれやせたりとよむ

祥　果　勅　曼　叡　寛　京

頭如霜蓬　膚似凍梨

如霜蓬　膚　小梨

頭如霜蓬　膚似凍梨

頭如霜蓬　膚似凍梨

頭如霜蓬　膚似凍梨　他

頭如霜蓬　膚似凍梨

頭如霜蓬　膚似凍梨

承久　頭如霜蓬膚似凍梨

霜蓬は霜かれのよもぎなり　霜のよもぎは白くみしかき物なり　そのことく髪の白くみしかき事を云なり　凍梨はこほりて皮にしはのよりたる梨なり　梨にはくろくこまやかなる紋ありそのことく年よりて膚にしはよりて梨の紋のやうなるくろくこまやかなる物出たるをいふなるへし

群　5-1 骨竦筋抗　5-2 面黒歯黄

承久　骨練筋抗面黒歯黄

東　骨練

彰　骨竦筋抗　面黒歯黄

曼　骨竦筋抗　面黒歯黄

徹　骨竦筋抗　面黒歯黄　平

他

寛　骨竦筋抗　面黒歯黄

京　骨練筋抗　面黒歯黄

やせおとろへたるゆへに骨もあらはれ筋もあらはれたる心なり雨露にさらされて日にてらされて粉をほどこすれは色も黒くなりたるなりかねをもつけされは蓄も黄になりたるなり

群書 6-1 裸形無衣 6-2 徒跣無履

承久 裸形無衣。徒跣無履。

東京 頃衣。

彰 裸形無衣 徒跣無履

曼 裸形無衣 徒跣無履

叡 裸形无衣 徒跣无履

寛 裸形無衣 徒跣無履

京 裸形無衣、徒跣無履

裸形は、あかはだかなりきるべき衣なければはだかにてゐるなり。徒跣の二字すあしとよむはくべきくつなければすあしにてゐる体なり。

群　聲振不能言　足蹇不能歩

承久　聲振而不能言　足蹇而不能歩

東　身振ふ不能　不能歩

彰　聲振而不能言　足蹇而不能歩

曼　色振而不能言　足蹇而不能歩

寮（長寿）　聲振而不能言平　足蹇而不能歩他

寛　聲振不能言　足蹇不能歩

京（六字長寿）　声振而不能言　足蹇而不能歩　振

義かくれなし、氣力つきてくたびれはてたる体なり

群　糇糧已盡　朝夕之飡難支

承久　糇糧已盡朝夕之飡難支

東　糇糧已盡　朝夕之貧難支

彰　糇糧已盡　朝夕之飡難支

曼　糇糧已尽　朝夕之飡難支

叡　糇糧已盡　朝夕之飡難支平

寛　糇糧已盡　朝夕之飡難支

京長　糇糧已尽　朝夕之飡難支

糇糧は、二字ながらかてとよむかてもつきはて、あさ夕の食物もなきなり。飡は食物也、

群　糠粃、悉畢　且暮之命不知　愛　糠粃悉畢且

東　糠粃悉畢　且暮之命不知

彰　糠粃悉畢　且暮之命不

曼　糠粃悉畢　且暮之命不知

叡　糠粃悉畢　且暮之命不知　他

寛　糠粃悉畢　且暮之命不知

京　糠粃悉畢　且暮之命不知

糠粃は、二字なからぬかとよむぬかかすのたくいの鄙食さへつきはて、朝夕の命もつなきかたき心なり、

群　10-1 左臂懸破筐　10-2 右手提壊笠

栄　左臂懸破筐　右手提壊笠

彰　左臂懸破筐　右手提壊笠

曼　左臂懸破筐　右手提壊笠

叡　左臂懸破筐　右手提壊笠他

寛　左臂懸破筐　右手提壊笠

京　長尚 左臂懸破筐　右手提壊笠

義かくれなし、筐は竹にてあみたるうつはものせ、

群	11-1 頸係一畏	11-2 背負一袋	12-1 袋容何物	12-2 垢膩之衣			
巣	頸係一畏	背負一袋	袋容何物	垢膩之衣			
彰	頸係一畏	背負一袋	袋容何物	垢膩之衣			
曼	頸係一畏	背負一袋	袋容何物	垢膩之衣			
徹	頸係一壕	背負一袋	袋容何物	垢膩之衣			
寛	頸係一壕	背負一袋	袋容何物	垢膩之衣			
京	緊勾 頸係一畏	背負一袋	八字長勾 袋容何物	垢膩之衣			

11義かくれなし

12垢は、人の身のあるなり、膩はおなしくあふら也、せなかにおひたる袋には、あかづきあぶらづきたる衣をいれたる心なり、

群　東　勧　曼　叡　寛　京

13-1 裏容何物　13-2 粟豆之餉

裏容何物　粟豆之餉

裏容何物　粟豆之餉

裏容何物　粟豆之餉

嚢容何物　粟豆之餉

嚢容何物　粟豆之餉

14-1 笠入何物　14-2 田黒蔦茂

笠入何物　田黒蔦茂

笠入何物　田黒蔦茂

笠入何物　田黒蔦茂

笠入何物　田黒蔦茂

笠入何物　田黒鳥茂

13 餉は、食物を人におくる事なり、くびにかけたるつゝみに人のあたへたるあはまめなどをいれたる心なり、

14 田の中にあるくはぬのくろきをほりて笠に入てもちたるなりくうへたる人食物なければ田の中の鳥茂をほりてくらふ事詩にもおほくつくれり笠は右の手にひさげたる笠なり、

	15-1	15-2	16-1	16-2
群	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
東	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
彰	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
曼	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
叡	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
寛	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰
京	筐入何物	野青蕨薇	肩破衣懸胸	頸壊蓑纏腰

15義かくれなし、春の野にもゆるさわらびをおりためてあじかに入たるなり、筐は、左の脇にかけたるあしかなり、

16乞食の躰 義かくれなし

群　17-1 匍匐衢間

果　匍匐衢眼

影　衢眼

曼　匍匐衢眼

徽　緊句 匍匐衢間

寛　匍匐衢間

京　緊句 匍匐衢間

17-2 徘徊路頭

徘徊路頭

徘徊路頭

徘徊路頭

徘徊路頭

徘徊路頭

匍匐の二字はらばひとよむ、徘徊の二字たちもとほるとよめり、ちまたにはらばひしてよろほひあゆみみちのほとりにたゝずみやすらふ義なり、衢間は、みちのちまたなり、路頭は、みちのほとりなり、

群　予問女曰　18-1　汝何郷之人　18-2　誰家之子　18-3

東　予問女曰　汝何郷之人　誰家之子

彰　予問女曰　汝何郷人　誰家之子

曼　予問女曰　汝何郷之人　誰家之子

叡　予問女曰（傍ヲ）　汝何郷之人（平）　誰家之子（他）

寛　予問女曰　汝何郷之人　誰家之子

京　緊句　予問女曰　汝何郷之人　誰家之子

義なれなし、予は、大師なり、女は小町なり、汝も小町をさし云

群　東　彰　曼　敏　寛　京

19_1 何村往還

誰村往還

誰村往還

何村往還

何村往還

何村往還

何村往還、

19_2 何縣去來

何縣去来

何縣去来

何縣去来

何縣去来

何縣去来。

村縣、いづれも在所なり、人家のおほき所をあかたといひすくなきをむらといふ、往還来はいづれもゆき、なり、

	20-1	20-2	20-3	20-4
洋	有ル父母哉	無キ子孫歟	無キ兄弟歟	有ル親戚哉
東	仆父母哉	无子孫欤	无兄弟欤	有親戚哉。
彰	有父母哉	無子孫欤	無兄弟欤	有親戚哉
曼	有リ父母哉	無キ子孫欤	無キ兄弟欤	有リ親戚哉
叢	有ル父母哉平	无キ子孫欤他	无キ兄弟欤他	有ル親戚哉平
寛	有ル父母哉	無キ子孫欤	無キ兄弟歟	有ル親戚哉。
京	有リ父母哉	無キ子孫欤	無カ弟欤	有リ親戚哉上

義かくれなし、親戚はしんるいなり、父のかたのしんるいを親といひ、母のかたのしんるいを戚といふくはしくその人の在所又はしんるいなどをたつねとひたる躰なり、

群 21-1 女答弓曰吾是　21-2 倡家之子　21-3 良室之女（一作娘）焉

東 女荅弓曰吾是　倡家之子　良室之女焉

彰 女荅弓曰吾是　倡家之子　良室之女焉

曼 女荅弓曰吾是　倡家之子　良室之女焉

徹 女荅曰（湯カ）　吾是　倡家之子（緊カ）　良室之娘（他本）

寛 女荅曰吾是　倡家之子　良室之娘

京 女荅曰吾是　倡家之子　良室之娘

（溫カ 緊カ）

是よりおんなのこたへたる事をかけり、　倡の字となふるとよめり、倡家とは、歌舞をわさとする家なり、良室はとみさかへたるいえなり、

群　22壯時ハ憍慢寂甚　23衰日ハ愁歎猶深

東　壯時憍謗最甚　衰日愁歎猶深

彰　壯時憍慢最甚　衰日愁歎猶深

曼　壯時憍慢最甚　衰月愁歎猶深

叡　壯時憍慢寂甚　他

寛　壯時憍慢寂甚　形衰日愁歎猶深

京　壯時憍慢最甚　衰日愁歎猶深

長尊　六字

22憍慢は、我身を自慢して、おごりたるなり　若かりし時は、わか身の良室のむすめにしてみめかたちのよきにほこりたる躰なり、

23愁は、うれいなり、歎は、なけきなり、年たけ色おとろへたる日は家もおちふれてよつ心のまこならすして、愁歎ふかき心なり、

群　24-1 齡未及二八之負　24-2 名殆兼三千之列

東　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

彰　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

曼　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

徽　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

寛　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

京七字　齡未及二八之負　名殆兼三千之列

二八は十六歳なり、をんなのみめかたちさかんなる時なり、三千之列は唐の玄宗の宮中には美女を三千人えらひて後宮にをかる、なり長恨哥にも後宮佳麗三千人とあり列はつらなり、年いまだ十六にもたらぬ時分よりみめかたちのおほえ世上にはなやかにしてすでに三千人のかずにもつらなりぬべきはまれありたるといふ心なり、

群　25-1 被寵華帳之裏　25-2 不歩外戸

東　被寵華帳之裏　不歩外戸

彰　被寵華帳之裏　不歩外戸

曼　被寵花帳之裏　不歩外戸

叡　被寵花帳之裏　不歩外戸

寛　被寵花帳之裏　不歩外戸

京大字　被寵萃花帳之裡　不歩外戸

花帳は、花をぬい物にしたるとばりなり、外戸は外面なり、……

25-3 被愛珠簾之内

被愛珠簾之内

被愛珠簾之内

被愛珠簾之内

被愛珠簾之内

被愛珠簾之内

26-4 無行傍門

无行傍門

無行傍門

無行傍門

无行傍門（平）

無行傍門

無行傍門

花帳は、花をぬい物にしたるとばりなり、珠簾は、玉すだれなり、外戸は外面なり、傍門は、かたはらなる門なり、父母のてふあいふかきゆへにつねにみすきちやうの内にすみてそともへはぬ躰せ、

群　26 朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌

東　朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌

彰　朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌

曼　朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌

徽　朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌　他

寛　朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌

京士字、朝向鸞鏡點蛾眉而好容指

ふなり、容貌の二字の義前にみえたり、あしたにはかゝみにむかひて、眉をつくしくつくりて、かたちをよくせる心なり、

鸞鏡は、かゝみなり、むかし罽賓國の王峻仰といふ山にあみをはりて、一の鸞鳥をとりたまへり、王その聲を聞たまはんとて三とせまてかいたまひけれども つゐに一聲もなかさりけり ある時その夫人王にまうされけるは 鳥その友を見てかなしずなくものなれはかれにかゝみをみせたまへと申されける さらはとてかゝみをかの鳥にみせけれはをのれかゝ影の鏡にうつりけるをみてをのれかゝ友とおもひかなしみなきてその夜つゐに死にけり、孤鸞照鏡といふは、此事なりけれより鏡を鸞鏡といへり、蛾眉は眉のほそくなかくうつくしき事なり、蛾といふ虫の眉はそくなかくしてうつくしきものなり、蛾は、かいこのむしのてふになりたるをいたゝきをよくせる心なり、

群　暮取鳳釵畫蟬翼而理艶色

東　暮取鳳釵畫蟬翼文理艶色

彰　暮取鳳釵畫蟬翼而理艶色

曼　夕取鳳釵畫蟬翼而理艶色

徽　暮取鳳釵畫蟬羽翼而理艶色乎

寛　暮取鳳釵畫蟬翼而理艶色

京　暮取鳳釵畫蟬翼而理艶色

鳳釵は、鳳凰をつくりつけたるかんさしなり、蟬翼は、髪の髪を蟬の羽のごとくうつくしくわかねたる鉢なり、艶色はうるわしき色なり、ゆふへにはかんさしをとり髪を蟬の羽を点かきたるやうにうつくしくゆいてかたちのうるはしきやうにとりつくろひたるなり、

群　28-1 面不絶白粉　28-2 顔無断丹朱　29 桃顔露咲　30 柳髪風梳

東　面不絶白粉　顔無断丹不　桃顔露咲　柳髪風梳

彰　而面不絶白粉　顔無断丹朱　桃顔露咲　柳髪風梳

曼　面不絶白粉　顔無断丹朱　桃顔露咲　柳髪風梳

叡　面不絶白粉　顔矢断丹朱　桃顔露咲他　柳髪風梳平

寛　面不絶白粉　顔無断丹朱　桃顔露咲　柳髪風梳

京　面不絶白粉　顔無断丹朱　桃顔露咲　柳髪風梳

28義かくれなし、白粉は、おしろいなり、丹朱は、へになり、たしなみふかくてつねにけさうしたる躰なり、

29かんはせは、桃の花の露にさき出たるやうにうつくしきとなり30かみは柳の風にくしけつれるやうにたをやかなる躰なり

31 腕肥玉釧狹

腕肥玉釧狹

腕肥玉釧狹

腕肥玉釧狹

腕肥玉釧狹 他

腕肥玉釧狹

腕肥玉釧狹

32 膚脂錦服窄

膚膏錦服窄

膚膏錦服窄

膚膏錦服窄

膚脂錦服窄 平

膚脂錦服窄

膚脂錦服窄

31腕は、うでなり、釧は黄金珠玉のたくひにて輪を作りてゆびぬきのごとくひちにいるなり、うつくしく肥たるゆへに玉の釧もせばくなりたる心なり、約臂黄金寛一寸と詩につくりたるは、女の物おもひをしてやせてうでのほそくなりたる事なり、

32はだへ白くこえてあぶらつきてにしきのきものもせばくなりたるなり、

群　33　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

東　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

彰　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

曼　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

叡　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪　他

寛　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

京十字　暐曄　面子　疑芙蓉之浮曉浪

暐曄は、てりかゝやくなり、面子はかほはせなり、かほはせのつやありててりかゝやけるさまは、芙蓉のあかつきの浪の上にうかび出たるかことくなりとなり、こゝにて芙蓉といへる蓮花の事なるべし

34 婀娜腰支誤楊柳之亂春風

婀娜腰支誤楊柳之亂春嵐

婀娜腰支誤楊柳之亂春嵐

婀娜腰支誤楊柳之亂春嵐

婀娜腰支誤楊柳之亂春風

婀娜腰支誤楊柳之亂春風

35 不奈楊貴妃之花眼

不奈楊貴妃之花眼

不奈楊貴妃之花眼

不奈楊貴妃之花眼

不奈楊貴妃之花眼

不奈楊貴妃之花眼

34 婀娜の二字たをやかなりとよめり、腰支の二字こしはせとよめり、腰のほそくたをやかなる事は、柳のはる風にゆきみたれたるやうにみゆるとなり、

35 楊貴妃は、唐の玄宗の后なり、眼のつくしき事は、楊貴妃にもをとらじとなり、

群　36 不屑李夫人之蓮睫

東　不肖李夫人之蓮睫

彰　不肖李夫人之蓮睫

曼　不屑李夫人之蓮睫

徹　不肖李夫人之蓮睫 平

寛　不肖李夫人之蓮睫

京　不屑李夫人之蓮睫

37 衣非蟬翼不著

衣非蟬翼不紋

衣非蟬翼不被

衣非蟬翼不被

衣非蟬翼不着 他

衣非蟬翼不著

衣非蟬翼不着

36李夫人は漢の武帝の夫人なり、蓮睫は、まなしりの白くきよらなる事はちすの花のことくなりといふ心なり、まなしりのうつくしきは、李夫人にもまされりとなり、

37蟬翼は、前にみえたり、蟬翼とはきぬのうすくほそく糸すちのうつくしきをいへり

38 食非麞牙不飡

白非麞牙不飡

食非麞牙不飡

食非麞牙不飡

食非麞牙不飡平

食非麞牙不飡

食非麞牙不飡

麞はくじかなり、麞に牙あるもあり牙なきもあり牙あるをは、牙麞といふなり、麞牙とは、白米の事なり、米をよくつきたるは、麞の牙のごとく白きゆへに云なり、朗詠集霰の詩に、麞牙米霰声々脆とつくれるも、霰のふるは、白米をまくことくなりといふ義なり、

群　39 錦繡之服數滿蘭閨之裏

東　錦繡之服數滿蘭閨之裏

彰　錦繡之服數滿蘭閨之裏

愛　錦繡之服數滿蘭閨之裏

徽　錦繡之服數滿蘭閨之裏　他

寛　錦繡之服數滿蘭閨之裏

京十字ニ　錦繡之服數滿蘭閨之裡

錦繡之服（服）はにしきぬい物の衣裳なり、蘭閨はねやのうちのかふはしきをいふなり、蘭は香しき草なり いにしへは、沈麝のたく火なによりて蘭草をたきてその香を愛せるとなり、衣裳のかすおほくてねやのうちにつみかさねたる義なり、

群　羅綾之衣多餘桂殿之間

東　羅綾之衣多餘桂殿之間

勸　羅綾之衣多餘桂殿之間

曼　羅綾之衣多餘桂殿之間

徽　羅綾之衣多餘桂殿之間

寛　羅綾之衣多餘桂殿之間

京　羅綾之衣多餘桂殿之間綾

羅はうすものなり、綾はあやなり、桂殿も蘭閨におなし、蘭桂といつれもかふはしきものなり、義さへにおなし

群　41 緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

東　緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

彰　緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

曼　緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

叡　緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺　他

寛　湘袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

京十一字　緗袖飄飄如彩雲之廻翠嶺

緗は、はなだ色なり、飄飄はひるがへる義なり、はなだ色の袖のひるがへるは、色々の雲のみとりのみねをめぐれるがごとくなり、

42 絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱 平

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢袂暐曄似碧浪之疊蒼濱

絢の字あやとよめり色こに色とれる義也、色とれるたもとのかゝやけるはみどりのなみの看うなはらのはるべにたゝみよせたるやうにみゆるとなり、

群	綺羅照地[43]	光色飜天[44]
東	綺羅照地	光色飜天
彰	綺羅照地	光色飜天
曼	綺羅照地	光色飜天
徹	緊ウ 綺羅照地	光色飜天 平
寛	綺羅照地	光色飜天
京緊句	綺羅照地	光色飜天

43 綺羅の二字いつれもうすものなり、

44 光色は、衣裳の色々ひかりかゝやく義なり、地をてらし天にひるかへるは、衣裳の華麗みちくなる心なり、

群　菟衾貂一作豹裘濕紅藍而色濃

45-1　45-2

東　兎衾貂裘濕紅藍ヲ色濃

彰　菟衾貂裘濕紅藍而色濃

曼　兎衾貂裘濕紅藍而色濃

徹　兎衾豹裘濕紅藍而色濃

寛　菟衾豹裘濕紅藍而色濃

京十字…　菟衾豹裘濕紅藍而色濃

兎衾は、兎の皮にてつくれるふすまのやうにやはらかにしたてたるふすまの事にや、豹裘とは、豹の皮にてつくれるかわごろものことくに衣に豹の皮の文をそめ付たる事なるへし、衾裘衣のたくひあるひはくれなゐにそめあるひはあひにそめていつれも色つくしゐ心なるへし

群　東　彰　曼　叡　寛　京

46 蟬、裓蛛、裳染紫蘓而色麗

蟬衣蛛裳染紫蘓之彩麗

蟬衣蛛裳染紫蘓而彩麗

蟬衣蛛裳染紫蘓而彩麗

蟬、裓蛛裳染紫蘓而色麗 他

蟬、裓蛛裳染紫蘓而色麗

蟬衫蛛裳染紫蘓而色麗

蟬衫は、せみの羽のごとくうすきひとへのきぬなり、蛛裳は裳のすそをしもふくらにぬいくくりたるがくものごとくなりといふ心なり、紫蘇は、草なり、葉のあをくむらさきの色にみゆるなり、

群　47 光照麒麟釧

東　光照麒麟釧

彰　光照麒麟釧

曼　光照麒麟釧

徽　光照麒麟釧

寛　光照麒麟釧

京学　光照麒麟釧

ふすまをならへたる鴛鴦のふすまといへり　又おし鳥をふすまの紋に付たるをも鴛鴦のふすまとも いふとみえたり　衣服のうつり香あまりてふすまにもかほれる心にや

48 香薫鴛鴦被

香薫鴛鴦被

香薫鴛鴦被

香薫鴛鴦被

香薫鴛鴦被

香薫鴛鴦被

47 釧前にみえたり、麒麟のかたちをつくれるたまきを麒麟の釧といへり　衣服のうつくしきか釧をてらしかやかせたる義也、

48 鴛鴦はおし鳥なり　おし鳥はちきりふかきものなるゆへに夫婦の

	49	50
群	巫峽行雲恒有襟上	洛川廻雪常處袖中
東	巫峽行雲恒在襟上	洛川廻雪常處袖中
彰	巫峽行雲恒在襟上（別ル漢字流レ）	洛川廻雪常處袖中（平名）
曼	巫峽行雲恒在襟上（道）	洛川廻雪常處袖中（平）
叡	巫峽行雲恒有襟上（他）	洛川廻雪常處袖中
寛	巫峽行雲恒在襟上	洛川廻雪常處袖中
京（字ミ）	巫峽行雲恒在襟上	洛川廻雪常處袖中

49 巫峽は、巫山といふ山なり、むかし楚国の王高唐といふ所にひるねしたまふとき、夢中に女一人きたりて、我は巫山の神女なり、ねがわくは玉とちきりをこめんといひけり、王夢中にかの神女と枕をならへたまひけり、神女たちかへるとて玉にいひけるは、今よりはあしたに

は雲となり、夕には雨となりて、あさ夕君のほとりをはなれじといひて、わかれけり、王夢さめてのちみたまひけり、あさことに王のましますあたりに雲たなびきけり、王その神女のためにやしろをたて、朝雲の廟と名づけたまひけり、巫峽の行雲とは此事也、襟は衣の名なり、沮在襟上とは、神女の禁王をこひたるやうに人にこひしたわる心なるへし

50 洛川は、洛水といふ大河なり、その河の神を、宓妃といふつくしき神女なり、迴雪は、雪をめくらすとよめり、かの洛水の神女の河よりうかびいて、あそびけるは、さながら風の雪をふきめくらすやうにたをやかなりといふ心なり、此事洛神の賦といふ書にみえたり、又洛水の神女に楚王の夢中にちぎりをこめたまふといふこと、神女の賦といふ書にもかけり、雪をめくらす袖と云事、此洛神の賦より出たるにや、又晉の謝莊といふ人禁中にして袖をひるかへし、迴雪の曲を舞かなでけりそれを、世俗の人おもしろくおもひてかなでけるとなり、洛川の迴雪常に處袖中とは、小野は倡家のむすめとあれは、袖をひるかへしまひかなでたるありさまのうつくしきさなから洛水の神女のすがたもかくこそとおもわる、心にや

群　51 羅韈綾鞋集龍鬚之席一作莚表

衆　羅韈綾鞋集龍鬚之莚表

彰　羅韈綾鞋集龍鬚之莚表

曼　羅韈綾鞋集龍鬚之席表

徽　羅韈綾鞋集龍鬚之席表

寛　羅韈綾鞋集龍鬚之席表

京十字ニ　羅韈綾鞋集龍鬚之席表

龍鬚之席とは龍鬚の席の事にや龍鬚の席とはむしろをはそくうつくしくおりてつやのある事龍のひげにておりたるやうなるによりて龍鬚の席といふなるへし席の詩に龍鬚香潔更光瑩とつくれり又李白か席の詩には青龍鬚とつくれり これはむしろの色かはりてあをき心なるへし 本文の義はかくれなし

52 緗履帛跣一作履　並馬牙之床端

紬履帛跣並馬牙之床端

緗履帛履並馬牙之床端

緗帛緒履並象牙之床端

緗履帛跣　並馬牙之床端平

緗履帛跣並馬牙之床端

緗履帛跣並象牙之牀端

緗は淺黄色なり、あさきの履なるへし、帛はきぬの揔名なりきぬにてしたるはきものなるへし、象牙の牀とは、象牙をちりはめたる牀なるへし、牀のけつかうなる事なり、むかし孟嘗君といふ人、楚國へ行けれは、象牙の牀をあたへけるとなり、

群　53 薫馨無盡

東　薫馨香无盡

彰　薫馨香無盡

曼　薫馨香無尽

緊　薫馨香无盡 他

寛　薫馨香無盡

京　緊 薫馨香無尽

54 光彩有餘

光彩有餘

光彩有餘

光彩有餘

光彩有餘

光彩有餘

53 薫馨の二字いつれもかうばしとよめり、沈麝のにほひつねにたえぬ心なり、

54 おしろいをぬり、へにをさして、だしなみあまりある心なり、

群　顔色美艶之姿、

東　顔色美艶之姿

彰　顔色美艶之姿

曼　顔色美艶之姿

叡　顔色美艶之姿

寛　顔色美艶之姿

京本　顔色美艶之姿

美艶の二字うるはしくみやびかなりとよめり、腮の字あきとよめり、かほはせのうつくしき事は花の露にひらけ出づることくなり、

53-2 相同花鰓開露之咲

相同花鰓開露之咲

相同花鰓開露之咲

相同華鰓開露之咲

相同花鰓開露之咲 他

相同花鰓開露之咲

相同花鰓開露之咲

群　56-1　氣香薫馥之皃

東　氣香薫馥之皃

彰　氣香薫馥之皃

曼　気香薫複之皃

叡　気香薫複之皃

寛　氣香薫複之皃

京　氣香薫馥之皃

群　56-2　不異蘭麝散風之匂

東　不異蘭麝散風匂

彰　不異蘭麝散風之匂

曼　不異蘭麝散風之匂

叡　不異蘭麝散風之匂　平

寛　不異蘭麝散風之匂

京　不異蘭麝散風之匂　上

馥の字かうはしきとよめり、蘭は蘭草也、麝香なり、麝は麝香なり、たしなみふかくてつねに衣裳にたきものしたるにはひは、蘭草麝香などのにはひの風にふきちらしたることくなり、

群　57采女奴婢陪從左右　58役仕（一作仕子）僮僕圍繞前後

東　采女奴婢陪從左右　仕子僮僕圍繞前後

彰　采女奴婢陪從左右　仕子僮僕圍繞前後

曼　采女奴婢陪從左右　仕子僮僕圍繞前後

叡　采女奴婢陪從左右　役仕僮僕圍繞前後

寛　采女奴婢陪從左右　仕子僮僕圍繞前後

京字　采女奴婢陪從左右

57采女奴婢は、下部なり、陪從の二字侍りしたがふとよめり、下部とも小町か左右にゐてみやつかへする心なり、采女奴婢いつれも女下部なるへし

58仕子僮僕是も下部なり、圍繞の二字かこみめくるとよむ仕子僮僕はいつれもおとこ下部なるへし小町か外へ出る時なとは、遠しの前後を打かこみて供奉する心なり、

群	59-1 家裝璃瑁	59-2 室粧瓊瑤
東	家裝璃瑁	室粧瓊瑤
彰	家裝璃瑁	室粧瓊瑤
曼	家裝璃瑁	室粧瓊瑤
徹	家裝璃瑁 緊句	室粧瓊瑤 他
寛	家裝璃瑁	室粧瓊瑤
京 緊句	家裝璃瑁	室粧瓊瑤

群	60-1 壁塗白粉	60-2 垣畫丹青
東	壁塗白粉	垣畫丹青
彰	壁塗白粉	垣畫丹青
曼	壁塗白粉	垣畫丹青
徹	壁塗白粉 他	垣畫丹青
寛	壁塗白粉	垣畫丹青
京 緊句	壁塗白粉	垣畫丹青

59 義かくれなし、瓊瑤の二字いつれもたまとよめり

60 丹青はいろへてゑをかける事なり、壁をはしろくし 垣には色をかけるなり、

61-1 簪貫琥珀

簪貫虎珀

簪貫虎魄

簪貫琥珀

簪貫琥珀

簪貫虎珀

簪貫琥珀

61-2 簾係蚌胎

簾係蚌胎

簾係蚌胎

簾係蚌胎

簾係蚌胎

簾係蚌胎

簾係蚌胎

62-1 帳並翡翠

帳並翡翠

帳並翡翠

帳並翡翠

帳並翡翠

帳並翡翠

帳並翡翠

62-2 幌接鷰紫

幌接鷰紫

幌接鷰紫

幌接鷰紫

幌接鷰紫

幌接鷰紫

幌接鷰紫

61 蚌胎は、かいの玉なり、

62 帳幌の二字いづれもとばりとよめり、翡翠ちいさくて羽のうつくしき鳥なり、はねの色二ありあかきを、翡といひ、あをきを、翠といへり、燕紫は、つはめなり、つはめも二色あり、越の國にあるつはめはむねのしたむらさきにてちいさきなり、それを紫燕といふなり、胡國にあるつはめはむねの

したまたらにて大きなるなり、翡翠を帳にぬいものにする事ふるき詩にも作れりをし鳥をも帳にぬい物にするとみえたり、帳並翡翠とはぬい物にぬいつけたる心なるへし、幌接燕紫是もおなし心なるへし

63-1 窓流雲母

窓流雲母

窓流雲母

窓流雲母

窓流雲母

窓流雲母

窓流雲母

63-2 戸浮水精

戸浮水精

戸浮水精

戸浮水精

戸浮水精

戸浮水精

戸浮水精

64-1 床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

床鋪珊瑚

64-2 臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

臺鏤瑪瑙

63雲母はきらゝなり、

64義かくれなし、家裝璫といふより此句までは家居の結構をいひのへたり

寛永本・群書類従本ともに66→65の順に配列。

群＊ 65 紅蠟之燈挑九枝而滿堂上

東 紅蠟之燈桃九枝而滿堂上

彰 紅蠟之燈挑九枝而滿堂上

曼 紅蠟之燈挑九枝而滿堂上

叡 紅蠟之燈挑九枝而滿堂上 他

寛＊ 紅蠟之燈挑九枝而滿堂上

京十字ミ、紅蠟之燈挑九枝而滿堂上

紅蠟之燈とは、あかくそめたる燭なり、挑九枝而滿堂上とは燭に色々の花のかたちをくれるを花燭といへり、燭に花をつくりて九の枝をつくれるなるべし その九の枝におなじく火をともすゆへに其光の堂上にみてる心なり、漢の武帝七月七日に西王母きたりし時九光の燈をともしたまふ事あり九枝燈九光燈おなし心なるへし 又九枝燈百枝燈といふ事ありいつれもおなし心なり、

群* 66 翠麝之薫招一作括百花而餘室中。

東 翠麝之薫招百花而餘室中。

彰 翠麝之薫栝百花而餘室中。

曼 翠麝之薫栝百葉而餘室中。

徹 翠麝之薫招百花而餘室中。平

寛* 翠麝之薫招百花而餘室中。

京 翠麝之薫栝百花而餘室中。

寛永本・群書類從本ともに66↓65の順に配列。

翠麝は、麝香なり、たきもの、よくにほふ事百の花のにほひをくうあつめたることくかほりてむろのうちにもあまれりとなり、

	67-1	67-2	68-1	68-2
群	万慮任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食充満
東	万慮任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食充満
彰	万慮任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食充満
曼	万蔓任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食充満
叡 緊勾	万慮任心 平	百思自足 他	衣裳奢侈 平	飲食充満 他
寛	万慮任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食花蒲
京 緊勾	万慮任心	百思自足	衣裳奢侈	飲食充蒲

67 万慮心のまゝにしてかけたる事なき義なり、

68 衣裳結構をつくし、食物美味をかさねてみちゝたる義なり、

辯 69 素粳之紅粒炊玉糝而盛金埦一作椀

東 素粳之紅粒炊玉糝而盛金埦。

彰 素粳之紅粒炊玉糝而盛金埦

曼 素粳之紅粒炊玉糝而盛金椀

叡 素粳之紅粒炊玉糝而盛金埦他

寛 索粳之紅粒炊玉糝而盛金埦

京 注字ミ、素稉之紅粒炊玉糝而盛金椀

素粳しろき米なり、粳はうるしねなり、紅粒は米のつぶのあかき事なり、素粳の紅粒とはつぶのあかき米をつきて白しろくしたる心なるべし よき米はつぶにてはあかくてつきて白きなり、古詩にも、落杵光糧白除毫子粒紅なりとつくれり、玉糝は、玉のこしきなり、金椀は金の椀なり、

70-1 緑醪之清酯（一作醑）

緑醪之清醑

緑醪之清醑

緑醪之清酯

緑醪之清醑

緑醪之清醑

緑醪之清醑

緑醪は、色のみどりなるにごり酒なり、よき酒は、蟻緑とてみどり色なる物なり、清醑はすみたる酒なり、緑醪之清醑とはにごり酒をよくしてすましたる事なり、

70-2 溢珠壺（一作壺）而斟鈿樽

溢珠壺而斟鈿樽

溢珠壺而斟鈿樽

溢珠壺而斟鈿樽

溢珠壺而斟鈿樽

溢珠壺而斟鈿樽

溢珠壺とは珠玉にてかきりたるつほにみちくなる事をいふなり、鈿樽とは、金銀珠玉のたぐひにて樽を結構にちりばめたるをいふ

[71] 鱠、非瀬鯉之腴不堂

鱠非瀬鯉之腴不堂

鱠非瀬鯉之腹不堂

鱠非瀬鯉之腹不堂

鱠非瀬鯉之腹不堂

鱠非瀬鯉之腹不食

[71] 瀬鯉之腴とは、あかき鯉の腹の下の肥たる所をいふなり、

[72] 義かくれなし　鯉のなますすしきのすし今のせには、めづらしき料理なり つねにあちはひたる事なしされともろこしには、鯉のなます鱸のすしを賞翫するといふ事 本草にみえたり

[72] 鮨、非紅鱸之鰓未味

鮨非紅鱸之鰓未味

鮨非紅鱸之鰓未味

鮨非紅鱸之鰓未味

鮨非紅鱸之鰓未味

鮨非紅鱸鰓未味

鮨非紅鱸之鰓不味

群　鮒一作鮒之包

東　翠鱒之炙

彰　翠鱒之炙

曼　翠鱒之炙

叡　翠鱒之炙

寛　翠鱒之炙

京　翠鱒之炙

鮒は大きなる貝なりむかし殷の紂文王を羑里といふ所にをしこめをきけるに散宜生といふ文王の臣下鮒の貝からの車の輪の大きなるをたつね出て紂にたてまつりければ紂事の外よろこびて文王をゆるしけるとなり此貝のみをあちわふといふ事つねに何の書物にも見あたらす又一説に魚のあぶらを鮒といふ説あり但魚のあぶらを鮒にぬりてつみやきにしたる事にや

和名集に鱒の字ますの魚とよめりますの魚はみあかきゆへに赤魚とも云なり、ここに翠鱒といへるはうちはあかくてそとはあをきゆへなるへし

群　果　彰　曼　徽　寛　京

[75]鮪一作鰯鮪之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

鮪鰯之韲

[76]鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

鮭鰹之臓

[76]鮭の字本草にもみえず和名集にものせず世俗にはさけのうをとよめり、鰹の字和名集にかつをうをとよめり、臓の字肉の入るあつものなり、にがしとよめる義よく相かなへるにや

[75]和名集に則鮪とかきてかひだことよめり、又本草に鮪といふ魚は馬のむちにに有たるこの事なるべし鰯の字和名集にあさちといふ魚なりとあり、三月桃の花さかりなる時この魚よくこえてあぢわひよろしき魚なりといふ事字書にみえたり、

群　77 膳一作膳　沸東河之鮎

東　膳沸東河之鮎

彰　膳沸東河之鮎

曼　膳沸東河之鮎

叡　膳沸東河之鮎

寛　膳沸東河之鮎

京　膳沸東河之鮎

77 膳と羹と字同じあつものとよめり、魚鳥の肉をよくにたるをいふなり、鮎の字和名集にあゆとよめり、春生し夏大きになり秋おとろへ冬死するゆへに年魚ともいふとあり本草にも、鮎魚をあつものにして食すれば百病を治するとあり、されども本草にのせたるは、あゆにてはなしなまづを、鮎といふとみえたり、

78 膾北海之鯛

膾煮北海之鯛

膾煮北海之鯛

膾煮北海之鯛

膾煮北海之鯛

膾煮此海之鯛

膾煮北海之鯛

78 膾の字あつものなり膳の字とおなし心なり、鯛和名集にたいとよめり、魚のかたち鮒に似てあかくひれのある魚なりとあり、本草にも鯛の字のせず大かたの字書にいつれにも、鯛の字はのせたれと字註なきにようてくはしくしれす

群 79鮭、條鯔楚

東 鮭條鯔楚

彰 鮭條鯔楚

曼 鮭條鯔楚

徽 鮭條鯔楚 平

寛 鮭條鯔楚

京 鮭條鯔楚

79和名集に條の字すばやりとよめりすばやりは、楚割の事なりと註せり楚の字もそわりなるべし遊仙窟といふ書に鯔條と書きてなよしのすばやりとよめりそばやりすばやり五音の相通にておなし事なるへし、鯔の字和名集にもなよしとよめりをぢしもすばやりとおなし事にや魚をわりてほしたる事なるべし

80鱣、脂鮪膓

鱣脂鮪膓

鱣脂鮪膓

鱣脂鮪膓

鱣脂鮪膓

鱣脂鮪膓

鱣脂鮪膓

80鮪の字和名集にはしびとよめせたり又膓の字をほしいおとよめり、膓の字をあつづくりとよめり、字書にてよくかんかへみれば膓の字と、膓の字と、声はかはれとも字かよふとみえたり、あつづくりとは、魚鳥の肉をあつく大きにきりて米の粉をぬりたるをいふなり、

81 鶉膝 一作 鴨膝鴈醢

鶉膝鴈醢

鶉脯鴨膝鴈醢

鶉臓鴨膝鴈醢

鶉膝鴈醢

鶉膝鴈醢

鶉膝鴈醢

81 臉の字義の字と心おなしあつものなり、遊仙窟に鴈醢とかきてかりのひしほとよめり 鶉臓とかきてうつらのあつものとよめり臉と臓と字相かよへり

82 鳳脯鵠臛

鳳脯鵠臛

鳳脯鵠臛

鳳脯雉臛

鳳脯鵠臛

鳳脯雉臛

鳳脯雉臛

82 遊仙窟に西山鳳脯といふ事あり 西王母が仙藥のうちに日鳳の脯あり 蒙山といふ山にすむ鳳凰の肉をほしたるをいふなり 人間の食物にはあらず 臛の字を字書にてかんがへみれば魚鳥の肉をなまやきにして なかばはなましなかばはよく熟したるをいふなり くしかはつやきとよめる字の心によくかなひたるにや

83 鵞膝熊掌蒐脾 疑 髀

鵞膝熊掌蒐脾

鵞膝熊掌蒐脾

鵞膝熊掌蒐脾

熊掌蒐脾

熊掌蒐脾

熊掌蒐脾

84 麋 一作 與龍對恐當 麕 麕 作 麕 或 麌 臆龍腦

麋臆龍腦

麋臆龍腦

麋臆龍腦

麋臆龍腦

麋臆龍腦

麋臆龍腦

83 熊のやせこころあちはひよろしき物なりといふ事、いつれの書にもみえたり、遊仙窟にも、熊掌蒐髀とかけり、

84 遊仙窟に、龍肝鳳髓を肴に出したる事あり、又鳳凰の脳は、仙人の菜なりといふ事あり、しからば龍の脳をもあちはふにや

群	東	彰	曼	叡	寛	京
85 煮蛸煎蛸	作	86 燒蛸焦蟹				
煮蛸煎蛸		燒蛸焦蟹	87 蟹螯螺膳			
煮蛸煎蛸		燒蛸焦蟹	蟹螯螺膳			
煮蛸煎蛸		燒蛸焦蟹	蟹螯螺膳			
煮蛸集蟹			蟹螯螺膳			
煮蛸煎蛸		燒蛸焦蟹	蟹螯螺膳			
			蟹螯螺膳	他 龜尾鶴頭		
			蟹螯螺膳	龜尾鶴頭		
			蟹螯螺膳	龜尾鶴頭		
			蟹螯螺膳	龜尾鶴頭		
			蟹螯螺膳	他 龜尾鶴頭		
			蟹螯螺膳	龜尾鶴頭		

85義かくれなし　86和名集に海蛸子とかきてたことよめり、又螯海蟹とかきていりこなるへし　87螯の字和名集にも蟹の大脚なりと註しておほつめとよめり、螺は貝のたくひ總名なるへし　88義かくれなし　遊仙窟にも鼈醯をのせたり

89-1 脩於銀盤

脩於鈎盤

脩於銀盤

脩於銀盤

脩於銀盤

脩於銀盤

89-2 調於金机

調於金机

調於金机

調於金机

調於金机

調於金机

90-1 饌於鈿盞

饌於鈿盞

饌於鈿盞

饌於鈿盞

饌於鈿盞

饌於鈿盞

90-2 膳於鏤墨

膳於鏤墨

膳於鏤墨

膳於鏤墨

膳於鏤墨

膳於鏤墨

89 桃の字まなびたの心なり、90 鈿盞は、金銀珠玉にてかざりたるさかづきなり、鏤墨は金銀をちりばめたる膳なり墨の字だいとよめり、素粒と紅粒といへるようこ、にいたるまでは食物に珍物をつくしうつわ物にも結構をつくして朝夕そなえたる餐なり、又是よりは菓子に珍物をつくしたる事をいふ

群　91又集神嶺之美菓　92聚霊澤之味菜

東　又集神嶺之義菓　聚霊澤之味菜

彰　又集神嶺之義菓　聚霊澤之味菜

曼　又集神嶺之義菓　聚霊澤之味菜

叡　又集神嶺之義菓　聚霊澤之味菜　不調歟

寛　又集神嶺之美菓　聚霊澤之味菜

京大字　又集神嶺之義菓　聚霊澤之味菜

91神嶺は神仙なとすくめる山なるへし　美菓とは味よろしき木のみなり、

92霊澤は、水神蛟竜なとのすむ澤なるへし味菜も味よき野菜なり、

群　東　彰　曼　叡　寛　京

93東門五色之瓜

東門五色之瓜

東門五色之瓜

東門五色之瓜

東門五色之瓜

東門五色之瓜

94西窓七班之茄

西窓七班之茄

西窓七班之茄

西窓七班之茄

西窓七班之茄

西窓七班之茄

不調声

93むかし秦の世に邵平といひしが東陵侯に封ぜられたり、秦やぶれて、漢の世となりし時かの邵平土民となりて、漢のみやこの東にして瓜をつくれり、其瓜味よろしきによりてその瓜を東陵の瓜といへり、又青門の瓜ともいふなり、東門といへるは長安城の東にして瓜をつくれるによりてなるべし　五色の瓜とは五色なるか風味よろしきよし詩にもつくれり　94此事かんがへしらす

群　95 燉煌八子之榛

東　燉煌八子之榛

彰　燉煌八子之榛

曼　燉煌八子之榛

徽　燉煌八子之榛 他

寛　燉煌八子之榛

京　燉煌八子之榛

95 遊仙窟にみえたり。燉煌は所の名なり、沙州の燉煌といふ所よりいつる棗は一ふさに實八つゝなりうとあり

96 爌煥五孫之李

爌煥五孫之李

爌煥五孫之李

爌煥五孫之李

爌煥五孫之李

爌煥五孫之李 平

96 此事つまびらかにしらず

群　97 大谷張公之梨

東　太谷張公之梨

彰　大谷張公之梨

曼　大谷張公之梨

徽　大谷張公之梨

寛　大谷張公之梨

京　大谷張公之梨

97 潘岳がかける閑居賦というものにみえたり、大谷といふ所に、張公といへる人すめり、その所に夏みのれる梨あり、天下にて、此木一本ありけるとなり、

98 廣陵曾一作楚王之杏

廣陵曾王之杏

廣陵曾王之杏

廣陵曾王之杏

廣陵曾王之杏

廣陵曾王之杏

廣陵曾王之杏

98 いまたかんかへしらす

群	東王父之仙桂[99]	西王母之神桃[100]
東	東王父之仙桂	西王母之神桃
彰	東王父之仙桂	西王母之神桃
曼	東王父之仙桂	西王母之神桃
叡	東王父之仙桂他	西王母之神桃平
覽	東王父之仙桂	西王母之神桃
京	東王父之仙桂	西王母之神桃

99 遊仙窟には、東王公之仙桂とかけり列仙傳にも東王公か傳あり東王父は、東王公なるへし遊仙窟の註に東王公は西王母か夫なりとあり つねに水玉といふものをくらひて仙人となり、天にのぼりて月の中の桂をよぢたるとあり桂の子を仙人は食するにや

100 漢の武帝の時西王母といへる仙人五色の麒麟にのりて武帝の宮殿の前にきたり桃七をいだしてその二をはおのれくらひ残る五をは武帝にたてまつれる、武帝その桃の核をとゝめをきてうゑんとのたまひければ、西王母申ばは、この桃は、三千年に一たびみのれり、人間の土地にうゑてはゆる木にはあらすといひけるとなり、

101 巍南牛乳之椒

巍南牛乳之椒

巍南牛乳之椒

魏南牛乳之椒

南ナ乳之椒 平

南牛乳之椒

魏南牛乳之椒

遊仙窟には、南燕牛乳之椒とあり、牛乳之椒とは、椒の子のふさなりてたれさがりたるか牛の乳のごとくなりといふ心なり、椒の字遊仙窟にも、はじかみとよませたり、はしかみは、薑の字なり、椒は山椒胡椒などの類なるへし和名集に生薑とかきてくれはしかみより、蜀椒とかきてふさはしかみとよみ辛夷とかきてこぶしはしか

みとよめり一切のかうき物をみなはしかみといへるにや魏南も南燕も椒のいつる所なるへし蜀の國よりいつるをは蜀椒といひ胡國よりいつるは胡椒といふ椒のいつる所あまたありとみえたり、

群書彰曼徹寛京

102 趙北鷄心之棗

趙北鷄心之棗

趙北鷄心之菓

趙小鷄心之菓

代鷄心之菓

北鷄心之菓

趙北雞心之棗

遊仙窟には北趙雞心之棗とあり棗の色あかくて形は雞の心に似たるゆへに雞心之棗といへり梁の簡文帝の棗の詩にも日映雞心校と作りたまへり棗は安邑といへる所よりいづるが名物なり安邑は魏の國なり趙の國にあらず趙の國よりも出へし

群　103 泰山花岳之乾柿

東　泰山羨岳之乾柿

彰　泰山花岳之乾柿

曼　泰山華岳之乾柿

叡　泰山花岳之乾柿

寛　泰山花笠之乾柿

京学　泰山華岳之乾柿

103 華岳は華山なり、もろこしに大山五あり、泰山華山嵩山衡山恒山此五なり、東にある大山を泰山といひ西にある大山を華山といふなり、いつれもかくれなき名山なり、されとも泰山にも華山にも乾柿のいつる事いまにかんかへしらす梁侯の爲禪の柿なといへるは珍物とみえたり

群　104 勝丘玉阜之篩栗

東　勝丘玉阜之篩栗

彰　勝丘玉阜之篩栗

曼　勝丘玉阜之篩栗

叡　勝丘玉阜之篩栗

寛　勝丘玉阜之篩栗

京学　勝丘玉阜之篩栗

104 此事いまたかんかへす、栗は泰の國燕の國よりいつるを一入賞翫するとみえたり、泰燕の人栗の木千本もちたれは其人のとめる事は千戸侯にもおとらぬといふ事漢書にみえたり

群 105 嶺南、丹橘

東 嶺南、丹橘

彰 嶺南、丹橘

曼 嶺南ニ丹橘

徹 嶺南丹榛 他

寛 嶺南、丹橘

京繁句 嶺南丹橘

105 遊仙窟にもあり、嶺南とは、南のはての國なり柑橘の類は暖國に多き物なり、南は陽氣はなはだしきによりて呉楚の国に橘多きとみえたり、

106 溪北、青柚

溪北、青柚

溪北、青柚

溪北ニ青柚

溪北、青柚 平

溪此、青柚

溪北青柚

106 柚も呉越に多きなり、淮南より淮北に柚の木をうつしうゆれは其まゝからたちになるといふ事列子にみえたる溪北いつれの所にやいまだしらず

群　107 河東素菱

東　河東素菱

彰　河東素菱

曼　河東素菱

徽　河東素菱

寛　河東素菱

京　河東素菱

107 吳越は、水國なれば、菱多きとみえたり、河東といへるは、吳越なるべし

群　108 江南翠蔬

東　江南翠蔬

彰　江南翠蔬

曼　江南翠蔬

徽　江南翠蔬

寛　江南翠花

京　江南翠蔬

108 菱蔬いつれも水中にある物なり、江南吳楚の間なるべし

群 109 万号千名珍味美香矣

東 万号千名珍味美香矣

彰 万号千名珍味美香矣

曼 万号千名珍味美香矣

徹 湯匂 万号千名珍味美香矣

寛 万号千名珍味美香

京 温匂 万号千名珍味美香矣

万号千名は右にしらせる所の色〻さまゝの食物をいふなり、珍味美香は、其食物とものめつらしきあぢわひありてうまくかうばしきなり、

群　110 三皇五帝之妃未成此驕

東　三王五帝之妃未成此憍

彰　三王五帝之妃未成此憍

曼　三皇五帝之妃未成此憍

徹　三皇五帝之妃未成此憍

寛　三皇五帝之妃未成此憍

京幸　三皇五帝之妃未成此驕

義がくれなし三皇は、伏羲、神農、黄帝此三代をいふなり、五帝は少昊、顓頊、高辛、唐堯、虞舜此五代をいふなり、妃は后妃とて后の事をいふなり、三皇五帝いつれも聖人なれはその后なとかやうの驕をさはめなまふへき事はあるましき事也、此句なにとも心ゆかす

漢王一作主周公之后一作妻未致其侈

漢王周公之妻未致其侈

漢王周公之妻未致其侈

漢王周公之妻未致其侈

漢王周公之后未致其侈他

漢王周公之后未致其侈

漢王周公之后未致其侈

漢王は高祖の事にや又武帝の時後宮に后妃あまたありしほとに武帝をさして漢王といへるにやよくしりかたし、周公は、周公旦なるへし周公旦も聖人なれは后妃の侈りたまはんは事あるましき事なり、此句も心得かたし

群　112　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨギル)於品也

東　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨギル)於品也

彰　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨギル)於品也

曼　榮剩(アマリ)於身賞過(スギタリ)於品也

徽　緊　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨギル)於品也　選ヵ

寛　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨギル)於品也

京　緊　榮剩(アマリ)於身賞過(ヨロコビスギタリ)於品

義がくれなし、栄花身にあまりて人にもてはやさる事は我身の分際にもこしたる心なり、

群　113-1 是以鶯囀三春之始

113-2 早翫雪梅於幌帳之下

是ニ鶯囀三春ノ始ニハ

早翫雪梅ヲ　幌帳之下

東　是以鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下

彰　是以鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下

曼　是以鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下

叡　是以鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下　他

寛　是以　鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下

京大字ミ　是以鶯囀三春之始

早翫雪梅於幌帳之下

三春とは、春は三ケ月あるによりて、三春といふ也、なり雪梅は雪中の梅なり、幌帳二字いつれもとはりなり

祥　東　彰　曼　徽　寛　京

114-1 鹿啼一作鳴九秋之終

鹿鳴九秋之終

鹿鳴九秋之終

鹿鳴九秋之終

鹿鳴九秋之終

鹿鳴九秋之終

114-2 晩賞露菊於簾簷之中一作下

晩賞露菊於簾簷之中

晩賞露菊於簾簷之中

晩賞露菊於簾簷之中

晩賞露菊於簾簷之中

晩賞露菊於簾簷下

晩賞露菊於簾簷之中

九秋とは、秋三ケ月は九十日なるゆへに、九秋といへり、露菊は露をふくめる菊の花なり簾簷はすだれとのきとなり、

115-1

群　待花時秉玉筆

東　待花時秉玉筆

彰　待花時秉玉筆

曼　待花時秉玉筆

徹　待花時康玉筆

寛　待花時秉玉筆

京十筆　待花時秉玉筆

115-2

詠紅櫻紫藤之和歌

詠紅櫻紫藤之和歌

詠紅櫻紫藤之和歌

詠紅梅紫藤之和歌

詠紅櫻紫藤之和歌

詠紅櫻紫藤之和歌

詠紅櫻紫藤之和歌

玉筆とは、珠玉をかざりて、結構なる筆なり、春の花さかりなる折節は筆を取てくれなゐの櫻むらさきの藤などのうたをゝみてかきつくるとなり、

116-1 迎月夜操金絃

116-2 調鶴琴龍笛之妙曲

迎月夜操金絃

迎月夜操金絃

迎月夜操金絃

迎月夜操金絃

迎月夜操金絃

調鶴琴龍笛之妙曲

調鶴琴龍笛之妙曲

調鶴琴龍笛之妙曲

調鶴琴龍笛之妙曲

調鶴琴龍笛之妙曲

金絃とは、金銀のかざりしなる琴琵琶の類なるべし、鶴琴とは琴の音が鶴のなく声に似たりといふ事なり、琴の曲の名に、別鶴操といふ曲あり又晉の師曠といふ樂師が琴をしらべたれば、鶴が来りてまふたりといふ事もあり琴の詩にも、鶴の事をつくれるはあまたあり、龍笛といへるも笛の音龍の鳴に似たるによりて、龍笛といふなり、又馬融が長笛の賦といふものにも龍鳴水中といへる事をかけり是は笛の声を聞て龍がおどろき鳴事をいへり、月のさやかなる夜には琴笛をならしてその秘曲をこゝろむる義なるべし

群　117-1 口吹鳳凰之管　117-2 梁塵廻而聲斜

東　口吹鳳凰之管　梁塵廻而聲斜

彰　口吹鳳凰之管　梁塵廻而聲斜

曼　口吹鳳凰之管　梁塵廻而聲斜

敏　口吹鳳凰之管　梁塵廻而聲斜

寛　口吹鳳凰之管　梁塵廻而聲斜

京　口吹鳳凰之管　梁塵廻而声斜

管とは、一切の吹物をいふなり、笛笙篳篥のたぐひなり、鳳凰之管とはむかし、黄帝の御時鳳凰のきたりて鳴けるを伶倫といふ人聞て嶰谷といふ所の竹をきりて、六律六呂あはせて十二の調子をきりいたせり、六律は、鳳の声をまなび、六呂は鳳の声をまなびたり、鳳凰は聖人の時ならでは出ぬ鳥なり、雄鳥を鳳といひ雌鳥を凰といへりしかるによりて一切の吹物はみな鳳凰の声を似せたる物なり、梁塵とは、うつはりのうへにつもりたる塵なりむかし虞公といふ人ありよく歌をうたへり声をかくして歌をうたへば梁の上につもりたる塵をうごかしたるとなり、又韓娥といひし人齊の國へゆくとて糧つきければ道々哥をうたひて食を人家にもとめけり此韓娥あまりに哥をよくうたひて一たび哥をうたへは其声のひびき人の家の梁の上をめぐりて三日かうちはその声絶ずとなんいふ事あり、梁塵廻而声斜なりとは、此二の故事を用ひていへるに也

118 手に取て鸚鵡之觴漢月落而影静

手に把て鸚鵡之觴漢月落て影静

手に把て鸚鵡之觴漢月落而影静

手に把て鸚鵡之觴漢月落而影静

手に取て鸚鵡之觴漢月落而影静

手に取て鸚鵡之觴漢月落而影静

鸚鵡の觴とは鸚鵡鳥のなりにつくれる盃なり〻貝のからを鸚鵡のかたちにきさみて盃に用ゆるとみえたり〻

鸚鵡盃の事李白が詩にもつくれり漢は大空をいふなり あふむのさかづきをとりて酒をくめは大空に

すむ月影かその盃のうち〻落て興あるとなり、

群　119 依之一作以是君臣子孫爭婚姻於日夜

東　是以君臣子孫爭婚姻於日夜

彰　是以君臣子孫爭婚姻於日夜

曼　是以君臣子孫爭婚姻於日夜

徹　依之君臣子孫爭婚姻於日夜

寛　依之君臣子孫爭婚姻於日夜

京　依之君臣子孫爭婚姻於日夜

京十字ミ、

婚とは、妻の家をいふなり、姻とは、夫の家をいへり、畢竟婚とは夫の妻をむかふる事なり、みめかたちうつくしくよろつ心のまゝなるによりて君も臣も此小町をむかへて妻をすべきとあらそふなり、日夜はよるひるなり、

群　東　彰　曼　叡　寛　京

120 富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

富貴主客競伉儷於時辰

伉儷の二字左傳より出たり。伉儷は匹耦なりと註せり。たぐひとよめり。匹耦とは物の一對ある事なり。おとこおんなをむかへて、夫婦になりたるは、一對の心なり。位たかく家とある人も此小町をむかへんとあらそふ義なり。競もあらそふの心なり。時辰の二字いつれもときなり。吉日良辰をえらびてむかへんとあらそふ義なり。

121-1
然而娜嬢不許
然而耶嬢不許
然而耶嬢不許
然而耶嬢不許
而爾娜嬢不許他
娜嬢不許
而爺嬢不許

121-2
兄弟無諾
兄弟元諾
兄弟無諾
兄弟無諾
兄弟矢諾乎
兄弟無諾
兄弟無諾

父爺は父をいふ嬢は母をいふなり　方々より申すへんといへとも小町か父母兄弟いつかたへもやらぬ也、

群　122 唯有獻王宮妃之議

東　唯有獻王宮妃之議

彰　唯有獻王宮妃之議

曼　唯有獻王宮妃之議

叡　唯有獻王宮妃之議

寛　唯有獻王宮妃之議

京八字、唯有献王宮妃之議

122 いかさま王宮にす、め入て女御更衣にもなさんとのはかり事をするなり、

123 凡人の妻にはなさしとなり、

群　123 專無與凡家妻之語

東　專无与凡家妻之語

彰　專無与凡家妻之語

曼　專無与凡家妻之語

叡　專矢與凡家妻之語

寛　專無與凡家妻之語

京八字、專無与凡家妻之語

124-1

群　而閒十七歳而喪悲母

東　二閒十七歳之喪悲母

彰　而閒十七歳而喪悲母

曼　而閒十七歳而喪悲母

叡　而閒十七歳而喪悲母　平

寛　而閒十七歳而喪悲母

京僧句　而閒十七歳而喪悲母

人の妻となりて年月うつりゆくほどに十七にして母にはなれ十九にして父におくれたり。慈悲の二字を父母にいけたり

124-2

群　十九歳而殞慈父

東　十九歳之殞慈父

彰　十九歳而殞慈父

曼　十九歳而殞慈父

叡　十九歳而殞慈父　他

寛　十九歳而殞慈父

京僧句　十九歳而殞慈父

群　125-1　二十一而亡兄

朱　廿一子亡兄

彰　廿一而亡兄

曼　廿一而亡兄

徹　二十一而亡兄乎

寛　二十一而亡兄

京廿字ミ　二十一　而亡兄

義かくれなし人にゆるさざりける父母兄弟もみななくなりたり

125-2　二十三而死弟

廿三子死弟

廿三而死弟

廿三而死弟

二十三而死弟他

二十三而死弟

二十三而死弟

群 126 別鶴之聲叫漢天而聽幽

東 別鶴之聲叫漢天之聽幽

彰 別鶴之聲叫漢天而聽幽

曼 別鶴之色唯叫漢天而聽幽

徹 別鶴之聲叫漢天而聽幽 平

寛 別鶴之聲叫漢天而聽幽

京 十字ミ、別鶴之声叫漢天而聽幽

人間のわかれをかなしみてなきさけぶを鶴のわかれにたとへたり。鶴はわかれをふかくかなしむものなるにより、商陵の穆子といふ者妻の別をかなしみて、別鶴操といふ、琴の曲をつくれり。又良の鶴の子を恵ふをおもふなといへるもわかれをかなしむ心なるべし

127 離鴻音喉一作喚胡地而愁切

離鴻之音喉胡地而愁切

離鴻之音喉胡地而愁切

離鴻之音更戾胡地而愁切

離鴻之音喉胡地而愁切他

離鴻之音喉胡地而愁切

離鴻之音喉胡地而愁切

離鴻はわかるゝ雁なりこれも人のわかれをゝのわかれにたとへたり、胡は北にある匈ひす國の名也、

ゝはこし地よりきたる者なれは喉胡地而愁切なりとかけり

群　東　彰　曼　徽　寛　京

128 朝居孤館而落淚

朝居孤館ニ之落淚

朝居孤館而落淚

朝居孤館而落淚

朝居孤館而落淚 他

朝居孤館而落淚

朝居孤館而落淚

129 暮坐孫庇而断腸

暮坐孤庇ニ之断腹

暮坐孤庇而断腸

暮坐孫庇而断腸

暮坐孫庇而断腸 平

暮坐孫庇而断腹

暮坐孫庇而断腸

128 孤館は、たゞひとつある家なり、

129 断腸は、なげき、かなしむ事の切なる心なり、あけくれさびしき所にひとりすゑて父母兄弟のわかれをかなしむ心なるべし

群　130_1 奴婢不レ從　130_2 僮僕無レ仕

東　奴婢不從　僮僕无仕

彰　奴婢不從　僮僕無仕

曼　奴婢不從　僮僕無仕

徹　奴婢不從　僮僕无仕　他

寛　奴婢不從　僮僕無仕

京　緊句　奴婢不從　僮僕無仕

奴婢僮僕の註は、前にみえたり、左右に侍りし奴婢前後をまもりし僮僕もみなちりぢりになりて小町につかはれぬとなり、

群　131-1　富貴漸微（ヌキテギ）

東　富貴漸微（クハスライテ）

彰　富貴漸微（ノウスラーテ）

曼　富貴漸微（ヤヤノウスク）

徹　富貴漸微（ノウスラキ）

寛　富貴漸微（ノウスラキ）

京　富貴漸微（ヤヤノウススキ）

群　131-2　衣食屢疎（シロツカナリ）

東　衣合屢疎（シハシロツカナリ）

彰　衣食屢疎（シロツタナリ）

曼　衣食屢疎（シハシロナリ）

寛　衣食屢疎（シハシロナリ）

京　家屋自壊（ヤフレタリ）

父母兄弟のあり一時にも似す家のおとろへたるさまなり、

群	131-3 家屋自壞レテ	*132-1 風霜暗墮一作隋	132-2 雨露偷浸ス			
東	家屋自壞ヤフレ	*風霜暗隅	雨露偷浸ヒンカニヨカス			
彰	家屋自壞ヤフレテ	*風霜暗隅ソラニキツ	雨露偷浸ヒンカニヨカス			
曼	家屋自壞ヤフレ	*風霜暗隅隋イ	雨露偷侵ヒンカニヨカス			
徽	家屋自壞ヤフレテ他	*風霜暗墮チ	雨露偷浸ヒンカニヨカス平			
寛	家屋自壞ヤフレ	*風霜暗墮ソラニ	雨露偷浸ヒンカニヨカス			
京	(家屋自壞ヤフレカリ)	風霜暗墜ソラニ	雨露偷侵ヒンカニヨカス			

家居あれはて、風雨霜露をもふせきかたき躰なり、

* 京大本を除く諸本135に續く

	135_1	135_2	138	138_2
群	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
東	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
彰	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
曼	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
叡	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
寛	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏
京	門戸既荒	草木悉塞	荊棘繁其内	狐狸棲其裏

135 家居あれ行まに草木生しけりて門をもとちふさける躰なり、

138 荊棘はむばらかたちなり、狐狸はきつねたぬきなり、家居あれたる躰なり、

（京大本のみ順序を異にす）

群　果　彰　曼　徽　寛　京

134-1 蝙蝠捷簷　134-2 蟋蟀居壁

蝙蝠棲簷　蟋蟀居壁

蝙蝠棲簷　蟋蟀居壁

蝙蝠棲簷　蟋蟀居壁

蝙蝠棲簷　蟋蟀居壁

133-1 熠燿滿光一作晃

熠燿滿光

熠燿滿光

熠燿滿光

熠燿滿光

133-2 雷電發聲

雷電發聲

雷電發聲

雷電發聲

雷電發聲

雷電發聲

134 蝙蝠は、かふむりなり、蟋蟀は、きりぐすなり、さひしき躰なり、

133 熠燿は、螢なり、雷電は、いかつちなり、いかつちなれはかならずいなびかりするものなり、さひしろ所は雷の声、電の色も（入すさまじき躰之、（京大本のみ順序を異にす）

群	136-1 福根已死	136-2 禍業一作自生	137-1 財産屢盡	137-2 貧孤獨遺
東	福根已死	禍業自生	財産屢盡	貧孤獨遺
彰	福根已死	禍業自生	財産屢盡	貧孤獨遺
曼	福根已死	禍業自生	財産屢盡	貧孤獨遺
叡	福根已死他	禍業自生平	財産屢盡他	貧孤獨遺平
寛	福根已死	福業自生	財産屢盡	貧孤獨遺
京	福根已死	禍業自生	財産屢尽	貧孤獨遺

136 さいわひの根たえてわざわひのはひこり生する。福はさいわひ 禍はわざわひなり、（133から續く）

137 財産は、家財なり、おやのなきものを孤といふ也、家にありし財宝もみなつきはてまとしくなりておやにもおくれてわが身ひとり世にのこりたるなり、

群　139-1 稻穀之餘盡作遍獻空王之施

東　稻穀之餘盡獻空王之施

彰　稻穀之餘盡獻宮王之施（空王佛）

曼　稻穀之餘尽獻空王之施

徹　稻穀之餘遍獻空王之施乎

寛　稻穀之餘遍獻空王之施

京　稻穀之餘遍獻空王之施

139-2 絹布之殘皆報亡親之德

絹布之殘皆報亡親之德

絹布之殘皆報亡親之德

絹布之殘皆報亡親之德

絹布之殘皆報亡親之德

絹布之殘皆報亡親之德

他

恩

立穀絹布の類の殘れるをはむなしくなりたるおやの思德を報ぜんため佛にたてまつり僧にほどこすとなり

群書類從　140-1　僅餘遺賊沽聲

東鑑　僅餘遺賊沽聲

彰考　僅餘遺賊沽聲

曼殊院　僅餘遺賊沽聲

叡山　僅餘遺賊沽聲　平

寛永　僅餘遺賊沽聲

京学　僅餘遺賊沽聲

140-2　適留殘蓄商畢

適留殘蓄商畢

適留殘蓄商畢

適留殘蓄商畢

適留殘蓄商畢　他

適留殘蓄商畢　又

適留殘蓄商畢　又　傍

141　嗟呼哀哉

嗟呼哀哉

嗟呼哀哉

嗟呼哀哉

嗟呼哀哉　傍

嗟呼哀哉

140 わつかに家にのこしたくはへたる財宝をもみなくうりつくして一物もなくなりたるなり、遺財は家にのこれる財宝なり、殘蓄は家に殘れるたくはへなり、

141 嗟呼は歎息の詞とて物を打なげくとて高いだせる詞なり、

142

群　昔聞鰥孤而餘家門

東　昔聞鰥孤之餘家門

彰　昔聞鰥孤而餘家門

曼　昔仁作大由丸鰥孤而餘家門

叡　昔聞鰥孤而餘家門

寛　昔聞鰥孤而餘家門

京　昔聞鰥孤而餘家門

鰥の字やもめとよめり。老て妻におくれたる者を鰥といへり。孤の字の註前にみえたり。小町むかし世にありし時はつまにはなれおやにおくれてひとり家にのこれるものをいき、おとしはかりにて身の上とはおもはさりける心也。

143 今見寡獨而蹠道路

今見寡獨之蹠道路

今見寡獨而蹠道路

今王造小町女寡独而蹠道路

今見寡獨而蹠道路 他

今見寡獨而蹠道路

今見寡獨而蹠道路

寡の字もやもめとよめり老て夫におくれたるを寡といふなり、獨とは老て子におくれたるをいふなり、いつれをひとり身になりたる事也、ひとり身になりて道のほとりにすくむ事は今身の上になりたるとなり、

144-1 無益廻人間一作界従一徒作懐生前之耻

辭　無益廻人界従懐生前之耻

叢　無益廻人界従懐生前之耻

鼇　無益廻人界従懐生前之耻

叡　無益廻人間従懐生前之耻平

寛　無益廻人間従懐生前之耻

京大字ミ　無益廻人間従懐生前之耻

かくうき世をめくりて乞食となり、いけるあひだの耻をさらさんより…

144-2 不如帰一有依字恐非是　佛道欲播死後之徳

不如帰佛道欲播死後之徳

不如帰依佛道欲播死後之徳

不如敗佛道欲播死後之徳

不如敗佛道欲播死後之徳　他

不如帰佛道欲播死後之徳

不如帰佛道欲播死後之徳

（かくうき世をめくりて乞食となりゝいけるあひだの耻をさらさんより）佛のみちにおもむきて後世にけかならす佛になるへき徳をほとこさんとなりゝ

145~146

群　伏惟金釵玉環無成佛寶之粧

東　伏惟金釵玉環無成佛寶之粧

彰　伏惟金釵玉環無成佛寶之粧

曼　伏惟金釵玉環無成佛寶之粧

徽　伏惟金釵玉環矢成佛寶之粧

寛　伏惟金釵玉環無成佛寶粧

京十字ミ、伏惟　金釵玉環無成佛寶之粧

145能〻思案してみる義なり、

146金釵は黄金にて作れるかんさしなり、玉環は玉のたまきなり、世にありし時のこがねのかんさし玉のたまきの結構なるも仏の御宝のかざりにもならぬとなり、

147 繡眼羅襟不作法衣之備

繡眼羅襟不作法衣之備

繡眼羅襟不作法衣之備

繡眼羅襟不作法衣之備

繡眼羅襟不作法衣之備 他

繡腹羅襟不作法衣之備

繡眼羅襟不作法衣之備

繡眼は、ぬいもの、衣なり、羅襟は、うすもの、衣なり、結構なる衣裳も墨染の衣の用にはたらぬとなり、

148-1

群　是以削霜鬢之愁遺

集　是以削霜鬢之愁遺

彰　是以削霜鬢之愁遺

曼　是以削霜鬢之愁遺

叡　是以（傍ヲ）削霜（密鬲ヲ）鬢之愁遺（也）

寛　是以削霜鬢之愁遺

京　是以（傍ヲ）削霜（密鬲ヲ）鬢之愁遺

霜鬢は老てかしらの白きをいふなり、愁遺の二字毛詩より出たり　義は字面のごとくなり、……

148-2 長欲猒六塵之棲

長欲猒六塵之棲

長欲猒六塵之棲

長欲猒六塵之棲平

長欲猒六塵之棲

長欲猒六塵之棲

霜髮は…六塵は色声香味觸法此六を云なり。すなはち、眼耳鼻舌身意此六よりおこる事なり。眼に物の色を(見耳)に物の声を聞、鼻に物の香をかぎ、舌に物の味をこころみ、身は物に觸、意に万法をおもふ。人の生をうけたる内は此六の物より煩悩おこれり。然るゆへに六塵といふなり。塵は物をけがす物也。人間の善心をは此六の物けがすによりて、いへり。一句の心は耳すまして白きかみのかしらに残りてみくるしきをそうおとして仏道に入て六塵の煩悩をはなれんとなり。

149-1 剃雪髮之纔殘

剃雪髮之纔殘

剃雪髮之纔殘

剃雪髮之纔殘

剃雪髮之纔殘

剃雪髮之纔殘

149-2 忽應歸三寶之境

忽應歸三寶之境

忽應歸三寶之境

忽應歸三寶之境

忽應歸三寶之境

忽應歸三寶之境

雪髮義霜鬢に同し　三宝は、佛法僧の三をいふなり、佛出世して法をとけり其法を僧ひろむるによりて此三をたからとせり　一句の義も上の句におなし

150

群　鸞鏡翫掌之日、青黛畫眉而好風（一作容）

東　鸞鏡翫掌之日青黛畫眉之好風容

彰　鸞鏡翫掌之日青黛書眉而好風容

曼　鸞鏡翫掌之日青黛容眉而好風容

叡　鸞鏡翫掌之日青黛畫眉而好鳳容

寛　鸞鏡翫掌之日、青黛畫盡眉而好鳳容

京十字ミ　鸞鏡翫掌之日青黛容眉而好鳳容

鸞鏡の義は、前にみえたり、翫掌とは鏡を手のうちにもちたる義なり、青黛は、あをきまゆすみなり、まゆすみにてうつくしく眉を作れる躰なり、鳳凰は五色をそなへてうつくしき鳥なり、好鳳容とはかたちをうつくしくしたる義なり、此一句はむかしわかかりし時の事をいへり

151

鵝珠戴頭之時、白毫遍身而備月皃

鵝珠戴頭之時、白毫遍身之備月皃

鵝珠戴頭之時、白毫遍身而備月皃

鵝珠戴頭之時、白毫遍身而備月皃

鵝珠戴頭之時、白毫遍身而備月皃 他

我珠戴頭之時、白毫遍身備月皃

鵝珠戴頭之時、白毫遍身而備月皃

鵝珠の事は、法苑珠林といふ書に見えたり、むかし天竺に一人の比丘あり、食をこふて、珠みがきの家にいたれり、折節其國より、大摩尼の珠をかの珠みがきにおほせてみがせられけり、珠みがき比丘の來れるをみて食をあたへんとてかの珠をみがききして内に入れ、その比丘あかき衣をきたりける、それは其色玉にうつり

てあかくみえけるをかたはらに飼てをきける、鵝といふ鳥珠たりて玉のあかきをみて魚鳥の肉かとおもひてやかて呑けりその後珠みがき食をもち來りてみれはかの大摩尼の珠なかりけり、珠みがき大きにおどろきて比丘にかたりていはく此珠は價千金なり、汝より外にぬすむべき人なし、かの珠をかへせといひけれ共、比丘、鵝ののみなるといは、鵝をころすへしとおもひておのれがぬすみたりとも又鵝の呑たり共いはさりけり珠みがき大きにいかりてかの比丘を杖着しけれは、比丘一首の偈をときてをのれがぬすまぬ事をいひけり珠みがきいよいよいかりて此比丘は強人なりとて繩をかけていましめけれは、苦痛のあまり耳目口鼻より血なかれけり其時かの鵝きたりて血のあかくみえけるを又呑けれは珠みがき腹をすへかねて鵝をうちころしけり比丘鵝のすでに死たるをみてなげきかなしみて又一首の偈をとなへて、鵝の珠を呑たる事をくはしくいひけり、其時珠みがき鵝の腹をさきて珠をとりいだし比丘にむかひて非法の罪をおほせける事をなげきかなしみて泣けりさてその比丘は行かたしらすせにけるとなり、畢竟こゝにて鵝珠といへるは明珠の義なるへし寶鏡の字對なれは鵝珠といへり又觀無量壽經に頂上毘楞伽摩尼寶以為天冠と云文あり、これは佛の摩尼宝珠をかしらにいたきて冠としたまふ事なり、鵝珠戴頭とは此文の心なるへし白毫遍身而備月額とは佛には眉間に白毫あり其白毫より光をはなちたまへは遍身月のてりかゝやくやうにみゆるをいふなり、此句は仏道に入て其身の佛になるへき事をいへるなるへし

群　152 須作尼以帰佛従僧以聴法

東　須作尼以帰佛従僧以聴法

彰　須作尼以帰佛従僧以聴法

曼　須作尼以帰佛従僧而聴法

徹　須作尼以帰佛従僧以聴法

寛　須作尼以帰佛従僧以聴法

京漫句、須作尼以帰佛従僧以聴法

帰佛とは佛道に帰依する事を云なり、うきせをはなれ尼となりて、佛道に帰依し僧にしたがひて佛法を聴聞してさとりをもひらくへしとなり、

153-1	然染而無可被之衣	153-2 饌而無可供之食
東	然染之无可被之衣	饌之無可供之食
彰	然染而無可被之衣	饌而無可供之食
曼	然而染而無可被之衣	饌而無可供之食
叡	然而信白染而无可被之衣	饌而无可供之食
寛	然而　染而無可被之衣	饌而無可借之食
京僧学ミ	然而染而無可被之衣	饌而無可供之食

佛道に、志ふかければ、尼になりて、きるべき衣なく僧を請て法をきかむにも、供養すべき食物なきとなり、

群　154-1　徒雖憶一心

泉　徒雖憶一心

彰　徒雖憶一心

曼　徒雖憶一心

叡　徒雖憶一心　平

寛　徒雖憶一心

京五字ミ　徒雖憶一心

心にいたつらに仏道をおもひたるばかりなり、十力といふ事、無量壽經に出たり くはしくは法界次第
といふ書にかきのせたり 十力一には、是處非處力 二には、業力 三には、定力 四には、根力 五には、欲
力 六には、性力 七には、至處道力 八には、宿命力 九には、天力、十には、漏尽力なり、これを佛の十力

154-2　猶未啓十方一カ作

猶啓十力

猶未啓十方

猶未啓十力

猶未啓十力　他

猶未啓十月

猶未啓十力

といへり、是處非處力とは、佛一切の諸法の是非善悪をよく知わかちたまふをいふなり、業力とは、一切衆生過去現在未来の三世の間につくる善悪の業因縁果報をよく知たまふをいふなり、定力とは一切の禅定解脱をよく知たまふをいふなり、禅定解脱とは悪念をはらいすて心のしつかになりたるをいふなり、根力とは一切の衆生に上根上智なるもあり、下根下智なるもありその衆生の根氵氣をよく知たまひて氣に應してすくひたまふをいふなり、欲力とは一切衆生種々の心欲をあまねく知りたまふを、心欲とは心にすきわかふ事あるをいふなり、性力とは、世間種々かきりなき性をあまねく知たまふをいふなり、至處道力とは、一切の道の至極のところをよく知たまふをいふなり、宿命力とは、劫初よりこのかた佛いくたびも生をかへて一切の衆生の中にうまれていつの時は名を何といひいつの時うまれいつの時死していかやうの樂をうけいかやうの苦をうけたりと云事をよくしりたまふをいふなり、たとへは阿弥陀は前生にて宝蔵宝といひたるすといふ心なり、釋迦は法源婆羅門の間に八十度往来したまふとなり、その度々の事をよく知おぼえたまふとなり、天力とは、仏の眼を天眼といひて一切衆生の眼に見えぬ所をも能く見たまふと云なり、是を天眼通とも云なり、漏尽力とは仏は一切の悪念つきて心も智慧も解脱するをいふなり、是をナカと云なり

	155-1	155-2	156-1	156-2
群	仰願諸佛	必導孤身云云	予聞此語	自陳其言
東	仰應願諸佛	必導孤身之	予聞此語	自陳其言
彰	仰願諸佛	必導孤身云	予聞此語	自陳其言
曼	仰願諸佛	必導孤身	予聞此語	自陳其言
徹	仰願諸佛	必導孤身	予聞此語	自陳其言
寛	仰願諸佛	必導孤身	予聞此語	自陳其言
京緊	仰願諸佛	必導孤身	予聞此語	自陳其言

155義がくれなし、三世の諸佛に此ひとりある身をみちびきて、佛になしたまへとなり、

156予は、弘法なり、かの乞食の物がたりを聞てそのいひたることくにかきのへたるとの義なり、

157-1

群　仰テ蒼天ニ而悲泣シ

巣　仰テ蒼天ニ之悲泣シ

勧　仰テ蒼天ニ而悲泣シ

曼　仰テ蒼天ニ而悲泣シ

徽　仰テ蒼天ニ而悲泣シ　他

寛　仰テ蒼天ニ而悲泣シ

京　六条ミ僧司、仰テ蒼天ニ而悲泣シ

天の色はあをきゆへに蒼天と云なり、白日は昼を云なり、この二食の物かたりのあはれなるをきゝて天にあふぎてなきかなしみ白日に地にふしてうれふるとなり、

157-2

群　俯テ白日ニ而愁吟ス

巣　俯テ白日之愁吟ス

勧　俯テ白日ニ而愁吟ス

曼　俯テ白月ニ而愁吟ス

徽　俯テ白月ニ而愁吟ス平

寛　俯テ白日ニ而愁吟ス

京　俯テ白月ニ而愁吟ス

群　168 夫以富貴者天之所與也東西南北之雲色不定

東　夫以富貴者天之所与也東西南北之雲色不定

彰　夫以富貴者天之所与也東西南北之雲色不定

曼　夫以富貴者天之所与也東西南北之雲色不定

徹　夫以富貴者天之所与也東西南北之雲色不定

寛　夫此　富貴者天之所與也東西南北之雲色不定

京十字ミ　夫以富貴者天之所与也東西南北之雲色不定

人間の富貴は、智慧才覚にもよらすもとめてうるにもあらす　たゝ天の与かとゝろなり、東西南北之雲色不定とは雲は無心にして風にしたがふ物なれはたゞ今まて東へゆく雲もやかて西にかへり南へいつるも其まゝ北へ入なり、人間の富貴も雲の不定ごとし　けゆまて富貴の身もあすはまつしくいやしくなるなり

しかるゆへに孔子も不義富且貴於我浮雲とのたまへり、

群　東　鼇　曼　叡　寛　京

159 愛樂者人之所感也生老病死之風音一作無常

愛樂者人之所感也生老病死之風聲无常

愛樂者人之所感也生老病死之風音無常

愛樂人々所感也生老病死々風毒無常

愛樂者人々所感也生老病死々風多无常

愛樂者人之所感也生老病死之風聲無常

栄樂者人之所感也生老病死之風声無常

人間のさかへたのしむ事は人のふかくめてうゝやむところなり生老病死とは人間の生をうけてはやがて老やすく老ては病おほく病をうけてはやがて死するなりこれ人間四苦なり此生老病死の風は時をまつ事なくおとつるゝなり人間のさかゆるほどを久しからぬといふ義也

群 160 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

東 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

彰 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

曼 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

徽 寄言老衰之女誰人永年有保富貴 他

寛 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

京西宮 寄言老衰之女誰人永年有保富貴

老衰之女は、小町をさして云なり、小町にはひきかせたる義なり、誰人永年有保富貴とは、小町ばかりにもあらず一切世間の人はつれも年ひさしく富貴を保たるはなきと云義なり、

161 欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

欲説孤寡之嫗孰子數歳有期康寧

孤寡之嫗を小町をさして、なほ孤寡の二字義前にしるせり欲説もときかせたる義なり、康寧の二字何れもやすしとよむなり、孰子數歳有期康寧とは小町にかきらすたれ人の子か年久しく浮世をやすくとくくす者はあるそと世間のつねなきありさまをいひきかせたる義なり、

群　162 因茲旦學樂天秦中吟之詩

東　因茲旦學樂天秦中吟之詩

彰　因茲旦學樂天秦中吟之詩

曼　旦茲旦學樂天秦中吟之詩

徽　因茲旦學樂天秦中吟之詩

寛　因茲　旦學樂天秦中吟之詩

京僧　因茲旦学樂天秦中吟之詩

樂天は白樂天なり、唐の世にかくれなき時人なり、秦中吟は白氏文集の第二の卷にのせたり、秦中吟の詩十首ありいづれも五言の長篇なり、今此詩五言の長篇にて、秦中吟の詩の風騒をきはめてつくれるとの義なり、秦中吟は白樂天が長安といふ所に居たる時つくれる詩なり、長安とは唐の世の都なり、此長安むかし秦の國のうちなれは秦中吟といへり

群　163 且、效幸地魯上詠之賦

兼　且效幸地噂上詠之賦

彰　且效幸地魯上詠之賦

曼　且效幸地魯上く詠賦（く字を下の○印に挿入の意）

徹　夕、效幸地噂上詠之賦　他

寛　且、效幸地噂上詠之賦

京　且效幸地噂上詠之賦　緊

164 韻造古調

韻造古調

韻造古調

韻造古調

韻造古調

韻造古調

163 幸地噂上詠之賦と云事いまたかんかへず

164 韻は韻脚とて詩を作る時韻をふむ事なり、韻をふむとは句の下に（句はざみ或は毎句に韻の字をおく事なり、古調は古風の義なり、韻字のおきやうふるき詩の風躰をまなびて作れる義なり、調の字しらべとよめり、詩をはうにひて琴琴などにしらべあはする物なれば古調といへり

群　165 詩賦新章云尒　一作尒云　166 一百二十四韻

東　詩賦新章尒云　一百十四韻

彰　詩賦新章云尒　一百廿四韻

曼　詩賦新章云尒　一百廿四韻

徹　詩賦新章乎尒云　一百二十四韻

寛　詩賦新章尒云　一百二拾十四韻

京醫　詩賦新章尒云　一百二十四韻

165 詩賦新章とは、風雅はふるき詩をまなびて作れ共詩の心はあらしきといふ義なるべし章は一章二章とて一首二首の義なりしかぶとはかくのごとく云といへる心なり、

166 韻字の数一百二十四と云義なり、しかれとも此の詩の韻字をかぞへみれは一百三十一字あり文字のあやまれるにや

題、跋、奥書、刊記　題を除く跋、奥書等の字體は原形を模写せず

群

玉造小町子壯衰書一首并序（内題・原）玉造小町子壯衰書（尾・原）

右玉造小町子壯衰書以古写三通并流布之印本校合畢

類

玉造小町子壯衰書一首（内題・原）

承久元年十二月七日於〇〇以舊本書點了　愚流（？）

一校了

本記之

以駿河中西（？）之雅教之所持之本今校點也

成一卿

果

玉造小町形衰記（簽・後）　玉造小町子形衰記（尾・原）

玉造小町子壯衰書一首（内題原）玉造小野小町子壯衰書一卷（尾原）

是卒ノ題号下ニ有之

善相公作

裏書云

伊勢物語注云　大師入定ハ承和二年三月廿一日御歳六十二小町ハ此時當九歳小町ハ天長二年生人也。其ト御作ト見合スレハ事外ニ相違ス大師逢小町衰老ニ後事不審之但大師御作ニ在現在未来記ニ爰知此書未来記ト云事ヲ

伊勢物語注云

小町ハ桓武天皇第十七王子賜小野姓小納言小野良實云、其子ニ出羽郡司第小綱言良家ト云、其子ニ蕃長姓小野小町也

鸞鏡ノコト　國名也

白氏六帖ニハ罽賓王獲一鸞懸鏡照之鸞覩影悲鳴舞ヲ云ヘ

私云此鳥者見发ヲ舞故寫鏡見影舞

鳳釵ノコト　釵ハ作レル鳳鳳形ニ故云爾

説文云扶渠華未發者爲菡萏已發者爲芙蓉也文又云蔤華之發者也

爾雅云荷扶渠其實曰蓮也文

巫山行雲事　文選第十在玉高唐賦

宋玉高唐賦曰楚襄王問玉此何与宋玉遊於雲夢之臺高唐之觀獨有雲氣王問玉此何氣也玉對曰所謂朝雲也昔者先王嘗遊於高唐怠而晝寢見一婦人曰妾巫山之女也聞君遊高唐願薦枕席因幸之去詞曰妾在巫山之陽高丘之阻朝為行雲暮為行雨朝朝暮暮陽臺之下

西王母女雲華夫人又名瑤姬也　仏成号也　此事見太平廣記

九枝燈事

唐帝前以九枝燈臺燈火也其故帝王政明照九州摽識也又云陽數之極不過九也燈是陽也故云九枝也

雲母有五種　雲英青　雲珠赤　雲液白　雲母黒　雲沙青黄

水精　經千歳氷成水精也

別鶴事　太平御覽　鶴部

琴操曰高陵牧子取妻五年無子父兄欲為改娶妻聞夜驚起倚戶悲嘯牧子聞之援琴鼓之飛鶴因愛之永離歎別鶴以舒情故曰別鶴操也　別鶴琴曲也

鸚鵡坏

公乘億云人作鸚鵡坏飲酒其坏飛也――等可見文選第七卷雪賦注

有云海中有貝其狀似鸚鵡鳥穿其背為酒器故曰――也

有云鸚鵡好酒鳥也故云尒(爾)也此義不可也云云

有云酒器又曰羽觴孔子家語注曰觴者所以盛酒者也言其微也文

翹林文苑曰用越王鳥為酒坏云云

有云離鴻者笙曲也文選注曰大曰鴻小曰鴈

有云笛有多種謂龍笛火笛水笛等也但笛從楚國出琴從吳國起

故云吳琴楚琴也琴操云仲尼鼓琴鸞失友獨鳴仲尼哀而作離鴻之曲文

文集六十八云　千年鼠化白蝙蝠黑洞深文

東西南北雲色事　論語曰不義而富且貴於我如浮雲云云

鮐背事　文選第二曰兒齒眉壽鮐背之叟云云此皆老人白也

涼燠事　涼秋冬燠春夏也

鳳凰皆事　有云鳳凰皆者笙笛事也　毛詩注曰鳳凰靈鳥也

仁瑞也雄曰鳳雌曰凰也　鳳凰之性非梧桐不棲非竹實不食也文　又云鳳文王兆麟武王祥瑞也

弄玉秦穆公女也吹簫之時鳳來詣鳳臺故云――云云

麒麟事　山海經云東海有仁獸狀如麒麟其伴有三百六十麒麟

其形鹿身羊頭牛尾一角一首有一角不踐生蟲不折生草文

麝香者　白米也　麝香似白米故云爾也

三千之列者　三千者宮女也　漢武帝之時西王母与三千仙女俱来　故學彼

宮中置三千后也　唐朝瑩真珠以銀貫之編此為簾故珠簾

皆（歟）　寶德二季庚午十月　日書之　假主　阿闍梨法才廿八

（以下右とは別筆）

右玉造小町壯衰書壹冊　元禄癸酉夏　佐々宗淳

於南都所獲也

玉造壯衰書（簽原）　玉造小町女壯衰書一巻（内題原、尾一終）

曼

玉造小町壯衰書（簽原）　玉造小町子壯衰書一首并序（崩巣塔南谷　淨教房　眞如藏　百六十二　慕）　空海撰（内題原）

于時慶長十四丙午正月十五日

此書□□仙波住砌書写堅者偈海之

叡

寛

玉造小町子壯衰書一首并　空海撰（内題原）玉造小町子壯衰書（尾原）

寛永癸未孟春吉日　三條通菱屋町　梅屋　林甚右衛門

京

玉造小町壯衰書註（發後）玉造小町子壯衰書一首并序（内題原）

右此注者高野山江致登山衆種々依懇望
寫之訖了　墨付九十七枚
他本ヲ以加点朱了
正保四丁亥卯月中旬寫之乞校合了　玄梁

京抄

玉造小町抄　全（發後）玉造小町子壯衰書一首并序（内題原）

玉造小町子壯衰書一首

予行路之次歩道之間任邊途傍有一女人容貌顦顇身躰疲瘦頭如霜蓬鬢似凍梨骨連筋枕面黒齒黄裸形無衣徒跣無履聲振而不能言足蹇而不能歩糧已盡朝夕之飡難支糠粃恚畢且

承久元年書寫本模寫